

豊かな人間性を育む指導の在り方に関する研究

—学校, 家庭, 地域が相互に連携した体験活動の推進—

平成26年度に実施した本県の児童生徒の生活の実態に関する調査の分析結果から明らかになった課題への対応を考察した。そして, 研究協力委員の所属校において, 児童生徒の発達段階や学校の実情を踏まえつつ家庭や地域との相互連携を図り, 児童生徒に豊かな人間性を育む効果的な指導の在り方についての研究実践を行った。

<検索キーワード> 豊かな人間性 実態調査 並べ替えによる分析 因子分析 発達段階
自己有用感 規範意識 体験活動 保護者 家庭 地域 相互連携

指導助言者

愛知淑徳大学文学部教育学科教授

中野 靖彦(平成26, 27年度)

オブザーバー

愛知県教育委員会総務課教育企画室主任主査

宇都宮裕人(平成26, 27年度)

研究協議会委員

日進市立赤池小学校教諭

伴野 正史(平成26, 27年度)

田原市立赤羽根小学校教諭

森下 正敏(平成26, 27年度)

南知多町立豊浜中学校教諭(現武豊町立富貴小学校教諭)

山下 克文(平成26年度)

南知多町立豊浜中学校教諭

菊池 真志(平成27年度)

碧南市立新川中学校教諭(現碧南市立南中学校教諭)

政年 耕平(平成26年度)

碧南市立新川中学校教諭

糟 有加里(平成27年度)

県立一宮北高等学校教諭

佐治 高志(平成26, 27年度)

県立知立高等学校教諭

小嶋 正人(平成26, 27年度)

総合教育センター研究指導主事(現稲沢市立大塚小学校教諭)

佐々木佐知子(平成25年度)

総合教育センター研究指導主事(現武豊町立富貴小学校教諭)

山口 雅俊(平成25年度主務者)

総合教育センター研究指導主事(現西尾市立平坂中学校教諭)

高木 善隆(平成26年度)

総合教育センター経営研究室長

加藤 応子(平成27年度)

総合教育センター研究指導主事

川口 永理(平成25, 26, 27年度)

総合教育センター研究指導主事

高石 幸信(平成26, 27年度)

総合教育センター研究指導主事

河野 健治(平成25年度)

総合教育センター研究指導主事

柴田 由美子(平成25, 27年度)

総合教育センター研究指導主事

小川 純子(平成26, 27年度)

総合教育センター研究指導主事

松山 博幸(平成26, 27年度)

総合教育センター研究指導主事

古関 利勝(平成25年度)

総合教育センター研究指導主事

吉 富 靖(平成26, 27年度主務者)

1 はじめに

これからの時代は、自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくための資質・能力が必要とされている。そのような自立した人間に育つためには、家庭及び家庭以外の生活環境が、児童生徒の人間性を育む過程において重要な役割を担っている。つまり、児童生徒にとって学校・家庭・地域という環境は、豊かな人間性を育むための大切な育ちの場であると言える。

しかしながら、近年、少子化や核家族化、共働き家庭の増加、地域社会における人間関係の希薄化、携帯電話やインターネットの急速な普及等が進む中で、児童生徒が経験する発達段階に応じた豊かな体験や人と関わり合う機会が減少している。これにより、自尊感情が乏しい、基本的な生活習慣の確立が不十分である、規範意識が低下している、人間関係を築く力や社会性の育成が不十分であるなどの指摘がある。

そこで、学校・家庭・地域が相互に連携した体験活動や人と関わり合う活動を推進することで、発達段階に応じた心の成長を促し、豊かな人間性を育む指導の在り方を研究する必要があると考えた。

2 研究の目的

本県の児童生徒の意識や生活の実態及びその保護者の意識や児童生徒との関わり方の実態を把握するとともに、児童生徒の発達段階における体験活動、学校・家庭・地域社会におけるさまざまな人との関わりがどのように人間性の育成に関係しているのかについて明らかにし、児童生徒に豊かな人間性を育む効果的な指導の在り方を探ることを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 本県の児童生徒及びその保護者の意識や実態に関する調査を実施する。
- (2) 調査結果を分析し、県全体の傾向や各学校の特徴を考察する。
- (3) 研究協力委員の所属校の特色や実態を踏まえて研究実践を行い、効果的な指導の在り方を探る。

4 これまでの研究との関係

愛知県総合教育センターでは、ほぼ5年に1度、本県の児童生徒の意識や生活の実態を把握するための調査を行い、その結果から得られる課題を解決するための学校現場における効果的な指導の在り方を探る研究を行ってきた。

平成16～18年度の「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」では、平成17年6～7月に行った調査の結果を分析しながら研究実践を進めた。規範意識の醸成には自己肯定感と過去の体験が深く関わることや、異校種連携に取り組むことに一定の成果があることが明らかになった。一方、家庭の機能低下、地域の人間関係希薄化が見られることや、地域に開かれた学校経営による、家庭・地域の価値再生が必要であることなどが課題として挙げられた。

平成20～22年度の「規範意識を高める学校・家庭・地域の相互連携の在り方に関する研究」では、平成21年6～7月に行った調査の結果を分析しながら研究実践を進めた。平成16～18年度の研究における課題と比べて、家庭・地域との相互連携や、生徒同士の関わり合い、社会体験活動などを通して行った研究実践に一定の効果があることが成果として挙げられた。一方、児童生徒の発達に

従って道徳的実践力を高める手だてや、規範意識を高めるための効果的な指導の在り方、地域を取り込んだ組織的な学校運営ができた上での相互連携の重要性などが課題として挙げられた。

本研究では、平成 26 年 5～7 月に行った調査の結果を分析しながら研究を進めるとともに、これまでの研究成果と課題を引き継ぎ、豊かな人間性を育むことが、児童生徒の発達段階や体験活動、学校・家庭・地域におけるさまざまな人との関わりとどのように関係しているかについて明らかにし、児童生徒の豊かな人間性を育む効果的な指導の在り方を探ることとした。

5 本研究における「豊かな人間性」とは

本研究では、「豊かな人間性＝感動する心や自らを律しつつ他人を思いやる心」と定義し、表 1 にある 31 項目を「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」と捉えることとした。

【表 1 「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」と捉えた調査項目】

1 約束やきまりを守ることは大切である	17 約束やきまりを守っている
2 人の気持ちが分かる人間になりたい	18 いのち(人や動物、植物)を大切にしている
3 うそをつくことはいけないことである	19 自分の役割や仕事を、責任をもって果たしている
4 いじめは、どんな理由があってもいけないことである	20 難しいことでも、失敗を恐れず挑戦している
5 いのち(人や動物、植物)は大切である	21 世界で活躍できる人になりたい
6 人にやさしくすることは大切である	22 将来の日本をよくする人になりたい
7 お世話になった人々に感謝をすることは大切である	23 人にやさしくしている
8 人のまじめな行為や発言を笑うことは、いけないことである	24 人が困っているときは、進んで助けている
9 人に会ったときにあいさつすることは大切である	25 家で動物や植物を育てている
10 自分の役割や仕事を、責任をもって果たすことは大切である	26 人に会ったらあいさつをしている
11 自然や環境を守ることは大切である	27 日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを伝えている
12 わたしは、よいところがある	28 人のまじめな行為や発言を笑わないようにしている
13 わたしは、人の役に立っている	29 今住んでいる地域の行事に参加している
14 わたしは、自分のことが好きである	30 学校の出来事などを家の人に話している
15 わたしは、困難にあっても、粘り強くがんばることができる	31 暮らしの中で、自然や環境を守るための活動をしている
16 健康や安全に気をつけ、規則正しい生活をしている	

6 実態調査の概要

(1) 調査内容

ア 児童生徒用調査

生育環境などの基礎項目と、「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」と捉えた項目からなっており、調査項目は 50 項目である【別添資料 1】。

イ 保護者用調査

家庭環境などの基礎項目、自分の子どもの行動についての評価、保護者としての子どもへの働きかけについての評価、望む子ども像からなっており、調査項目は 45 項目である【別添資料 2】。

(2) 調査方法

ア 調査対象

県内から抽出した小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に在籍する児童生徒及びその保護者

(ア) 児童生徒用調査 1,569 人

- ・ 県内から抽出した小学校に在籍する第 5 学年の児童 470 人（回収率 96%）
- ・ 県内から抽出した中学校に在籍する第 2 学年の生徒 580 人（回収率 97%）
- ・ 県内から抽出した高等学校に在籍する第 2 学年の生徒 499 人（回収率 99%）
- ・ 県内から抽出した特別支援学校に在籍する小学部第 5 学年、中学部第 2 学年、高等部第 2

学年の児童生徒 20 人（回収率 100%）

(イ) 保護者用調査 1,424 人

- ・上記小学校に在籍する第 5 学年の児童の保護者 469 人（回収率 95%）
- ・上記中学校に在籍する第 2 学年の生徒の保護者 537 人（回収率 90%）
- ・上記高等学校に在籍する第 2 学年の生徒の保護者 398 人（回収率 79%）
- ・上記特別支援学校に在籍する小学部第 5 学年，中学部第 2 学年，高等部第 2 学年の児童生徒の保護者 20 人（回収率 100%）

イ 調査方法

学校を通じた郵送による質問紙調査

ウ 調査期間

平成 26 年 5 月から同年 7 月までの 3 か月間

7 調査結果の分析方法

児童生徒用調査及び保護者用調査の結果は、それぞれの単純集計を基にして、「並べ替えによる分析」や「因子分析」，「相関分析」を行った。

(1) 単純集計【別添資料 3（児童生徒），別添資料 4（保護者）】

(2) 単純集計の並べ替えによる分析【別添資料 5（児童生徒），別添資料 6（保護者）】

「よく当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせた当てはまる（以下、「当てはまる」という）と答えた割合の多い順に並べ替えを行った。

(3) 因子分析【別添資料 7（児童生徒）別添資料 8（保護者）】

調査結果の分析を統計的にサポートするための手段として、因子分析を行った。因子分析に当たっては、SPSS (Statistical Package for Social Science) という統計解析ソフトを用いた。

(4) 調査項目の相関分析

調査項目の一つ一つについて、関係性の強さを数値で表現する相関分析を行った。

8 調査結果の概要

(1) 単純集計を基にした分析

ア 並べ替えによる分析

表 2～表 4 は、校種ごとの単純集計を、児童生徒の「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」と捉えた 31 項目を含む 35 の調査項目（以下、「項目」という）について、“当てはまる”と答えた割合の多い順に並べ替えを行い（別添資料 5），上位 5 項目と下位 5 項目を抽出したものである。これら各校種の上位 5 項目，下位 5 項目に着目し，特定の校種に見られる傾向や，全ての校種に共通した問題と考えられる傾向について考察した。

【表 2 小学生（第 5 学年の児童）】

順位	調査項目	割合 (%)	順位	調査項目	割合 (%)
1	いのち（人や動物 植物）は大切である	97.9	31	わたしは、困難にあっても、粘り強くがんばることができる	65.5
2	人にやさしくすることは大切である	97.5	32	わたしは、人の役に立っている	64.2
2	お世話になった人々に感謝をすることは大切である	97.5	33	わたしは、自分のことが好きである	60.0
4	人に会ったときにあいさつすることは大切である	96.8	34	悪いことをして身近な人（親や先生）にしかられる	58.3
5	自然や環境を守ることは大切である	96.6	35	自分のしたことで近所の人から注意される	17.6

順位	調査項目	割合 (%)	順位	調査項目	割合 (%)
1	いのち（人や動物 植物）は大切である	95.6	30	わたしは、困難にあっても、粘り強くがんばることができる 今住んでいる地域の行事に参加している	56.1
2	お世話になった人々に感謝をすることは大切である	95.4	32	わたしは、人の役に立っている	52.3
3	人にやさしくすることは大切である	94.7	33	わたしは、自分のことが好きである	47.0
4	自然や環境を守ることは大切である	94.5	34	暮らしの中で、自然や環境を守るための活動をしている	41.2
5	人に会ったときにあいさつすることは大切である 自分の役割や仕事を、責任をもって果たすことは大切である	93.7	35	自分のしたことで近所の人から注意される	13.7

順位	調査項目	割合 (%)	順位	調査項目	割合 (%)
1	お世話になった人々に感謝をすることは大切である	96.7	31	わたしは、人の役に立っている	43.4
2	約束やきまりを守ることは大切である	96.5	32	わたしは、自分のことが好きである	37.7
3	人にやさしくすることは大切である	95.7	33	暮らしの中で、自然や環境を守るための活動をしている	32.6
4	いのち（人や動物 植物）は大切である	95.3	34	今住んでいる地域の行事に参加している	30.5
4	自分の役割や仕事を、責任をもって果たすことは大切である	95.3	35	自分のしたことで近所の人から注意される	11.9

まず、上位5項目を比べてみると、どの校種においても上位であった項目は、「いのち（人や動物、植物）は大切である」（小・中1位，高4位）、「お世話になった人々に感謝をすることは大切である」（小・中2位，高1位）、「人にやさしくすることは大切である」（小2位，中・高3位）であった。特定の校種のみで上位であった項目についても、全て他の校種において10位以内であり、校種による大きな差は見られなかった。また、上位であった項目は規範意識に関する項目であり、どの校種においても児童生徒の規範意識は比較的高い傾向があることが分かった。

次に、下位5項目を比べてみると、どの校種においても下位であった項目には、「わたしは、人の役に立っている」（小・中32位，高31位）、「わたしは、自分のことが好きである」（小・中33位，高32位）が含まれ、児童生徒の自尊心の低さに関しては、どの校種においても共通に見られる傾向と考えられた。

また、同じくどの校種においても下位であった項目として「自分のしたことで近所の人から注意される」（小・中・高35位）があり、児童生徒と周囲の大人との関わりの希薄さについて、共通の傾向が見られた。しかし、項目「悪いことをして身近な人（家の人や先生）にしかられる」は、小学生34位，中学・高校生が26位であった。

さらに、項目「今住んでいる地域の行事に参加している」に“当てはまる”と答えた割合は、小学生74.2%，中学生56.1%，高校生30.5%であった。このことから、学年が進むに従って、児童生徒の地域との関わりが希薄になる傾向が見られた。

イ 校種間比較、経年比較、クロス集計による分析

続いて、並べ替えによる分析により、特徴的な傾向があると捉えた「自尊心」「児童生徒と周囲の大人との関わり」「地域との関わり」について、校種間比較、経年比較による分析に基づき、考察することにした。また、本年度、新たな調査項目とした「携帯電話やスマートフォンの利用時間」に関する項目について、児童生徒の「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」との関連を考察するために、クロス集計による分析を行った。

(ア) 自尊心について

自尊心について問う項目（「わたしには、よいところがある」「わたしは、人の役に立っている」「わたしは、自分のことが好きである」）のうち、特に自己有用感に関する項目「わたしは、人の役に立っ

ている」を取り上げた。

図1は、「わたしは、人の役に立っている」という項目についての回答の割合である。“当てはまる”と答えた児童生徒の割合は、学年が進むに従って低くなっていた。また、図2は、平成21年度に当センターが行った実態調査の「わたしは、人の役に立っている」という項目についての回答の割合である。図1と図2を比較すると、どの校種も大きな変化は見られなかった。

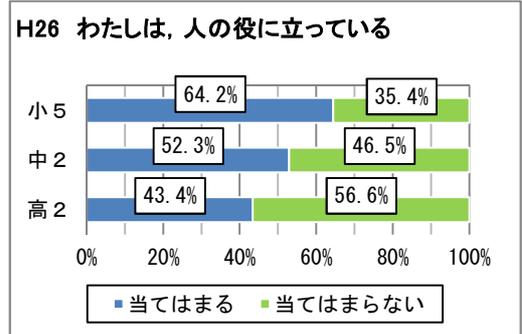
(イ) 児童生徒と周囲の大人との関わりについて

図3は、「悪いことをして、身近な人（親や先生）にしかられる」という項目についての回答の割合である。“当てはまる”と答えた児童生徒の割合は、中学生が一番高かった。また、図4は、平成21年度に当センターが行った実態調査の「悪いことをして、身近な人にしかられる」という項目についての回答の割合である。5年前の調査では、“当てはまる”と答えた児童生徒の割合は、学年が進むに従って低くなった。図3と図4を比べると、特に小学生の「身近な人にしかられる」と答えた割合が5年前と比較して9.5ポイント低くなっており、他の校種と比較して顕著な違いが見られた。そこで、小学生と周囲の大人との関わりに関する他の2つの項目（「よいことをして、身近な人にほめられる」「自分のしたことで、近所の人から注意される」）についても、平成21年度の調査と比較した（図5・6）。

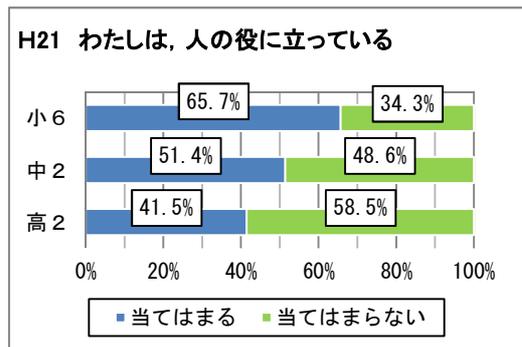
図5は、「よいことをして、身近な人にほめられる」という項目である。“当てはまる”と答えた小学生の割合は、5年前と比較して0.6ポイント低くなった。図6は、「自分のしたことで、近所の人から注意される」という項目である。この項目についても、“当てはまる”と答えた小学生の割合は0.5ポイント低くなった。

このことから、僅かではあるが、小学生は、5年前と

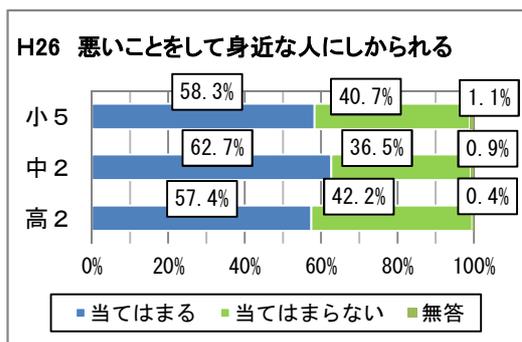
【図1 児童生徒への調査結果(平成26年度)】



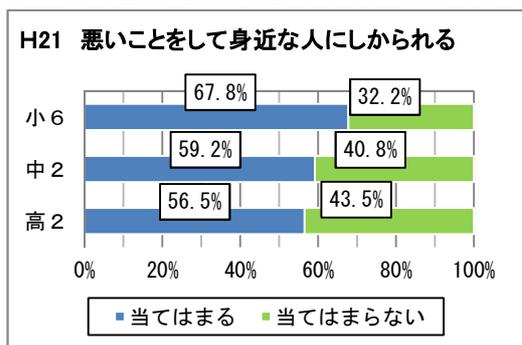
【図2 児童生徒への調査結果(平成21年度)】



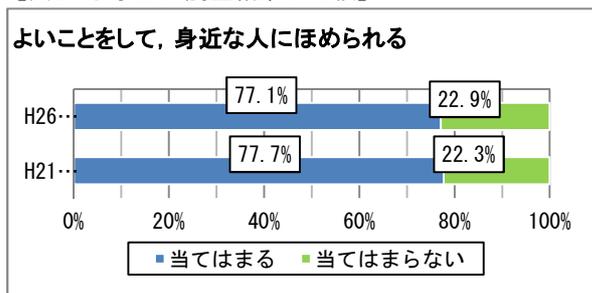
【図3 児童生徒への調査結果(平成26年度)】



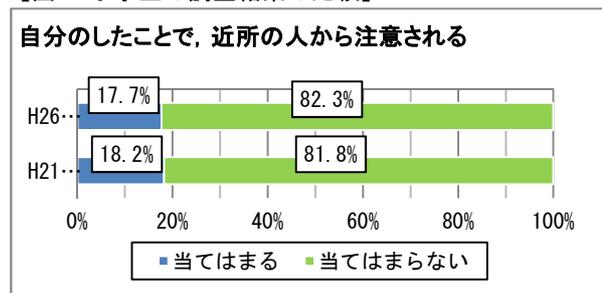
【図4 児童生徒への調査結果(平成21年度)】



【図5 小学生の調査結果の比較】



【図6 小学生の調査結果の比較】

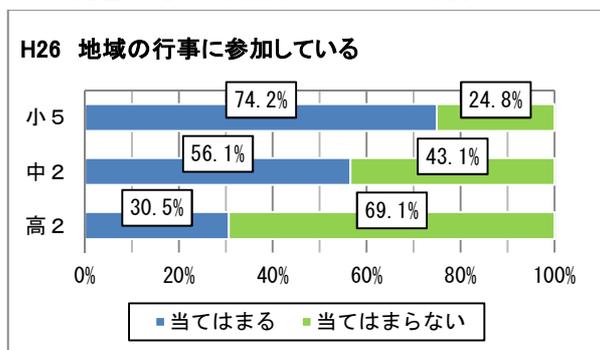


比較して、家の人や先生、近所の人など、周囲の大人から褒められたり叱られたりしたと感じる機会が減る傾向にあることが明らかとなった。

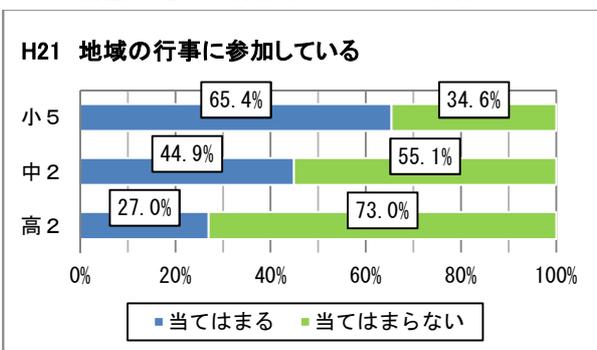
(ウ) 地域との関わりについて

図7は、「今住んでいる地域の行事に参加している」という項目についての回答の割合である。また、図8は、平成21年度に当センターが行った実態調査における「今住んでいる地域の行事に参加している」という調査項目についての回答の割合である。“当てはまる”と答えた児童生徒の割合は、どの学年も5年前の調査に比べて増加している。しかし、5年前の調査、本調査ともに、学年が進むに従って地域の行事に参加している児童生徒の割合は顕著に低くなっており、特に高校生は地域の行事に参加することが少なく、地域との関わりが薄いと言える。「将来どんな理由で仕事を選ぶか」の項目では、高校生の30.5%が「自分の趣味や特技」、22.3%が「人や社会のため」と回答している。しかし、地域との関わりが薄い高校生にとって、自分の趣味や特技をどのように生かすことができるのか、人や社会にどのように貢献できるのかということについて、地域行事への参加を通して学ぶ機会は十分ではないと考えられる。

【図7 児童生徒への調査結果(平成26年度)】



【図8 児童生徒への調査結果(平成21年度)】



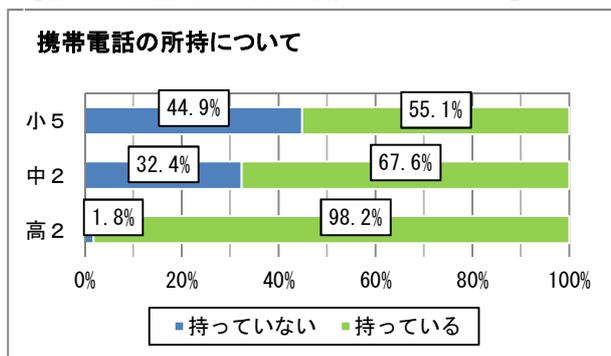
(エ) 携帯電話の利用時間との関連について

図9～図12は、基礎項目のうち、特に携帯電話やスマートフォン等の携帯端末(以下、「携帯」という)の利用時間と就寝時刻についての調査結果である。

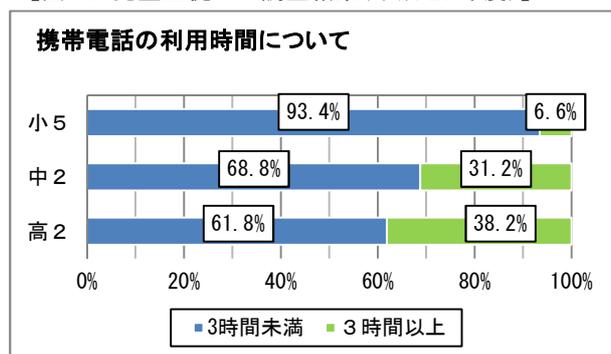
図9は、1日に何時間携帯を利用するかという項目について、「持っていない」と回答した児童生徒と、一定時間利用していると回答した児童生徒(図9では「持っている」と表示)の割合を示したグラフである。学年が進むに従って携帯を利用する割合は増加し、高校生になると98.2%が利用している。

図10は、携帯を一定時間利用している児童生徒の1日の利用時間について、「3時間未満」と「3時間以上」で分けたグラフである。利用時間についても、学年が進むに従って多くなり、中学生は所持している生徒の31.2%が、高校生は所持している生徒の38.2%が1日に3時間以上利用している。そこで、

【図9 児童生徒への調査結果(平成26年度)】



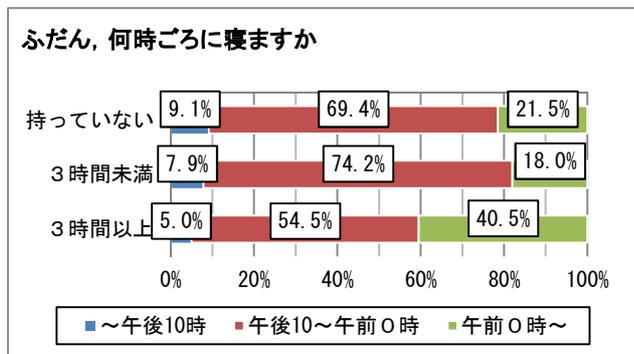
【図10 児童生徒への調査結果(平成26年度)】



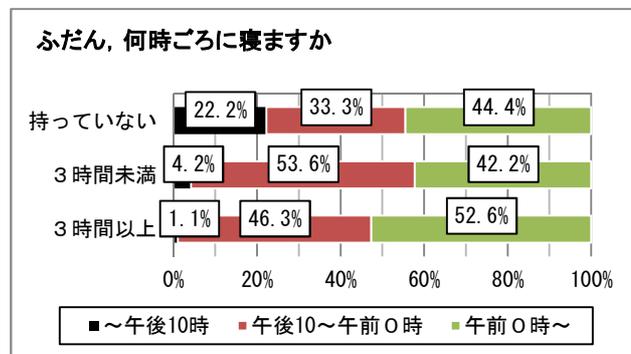
携帯の利用時間の影響を調べるために、他の項目との関連について、クロス集計を基に分析を行った。なお、小学生は3時間以上利用していると回答した割合が極端に低いため、分析の対象から外した。

まず、携帯の利用時間と基本的な生活習慣との関係について分析を行った。ここでは、項目「ふだん、何時頃に寝ますか」との関連について取り上げる。図11は中学生、図12は高校生のクロス集計の結果である。

【図11 中学生の調査結果】



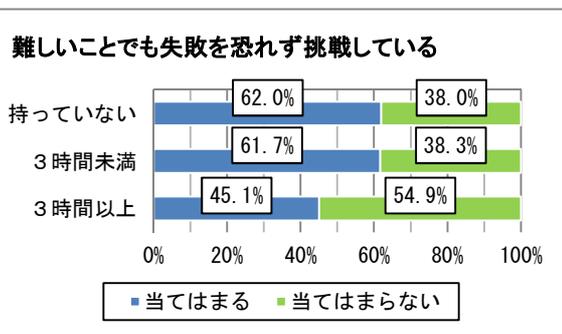
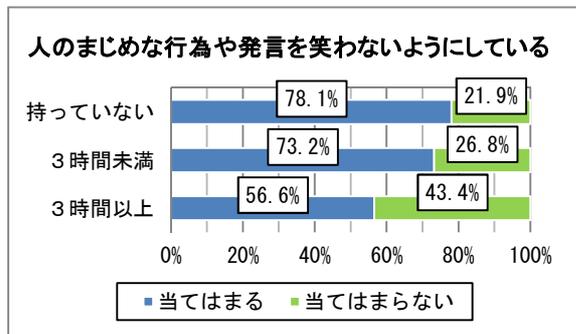
【図12 高校生の調査結果】



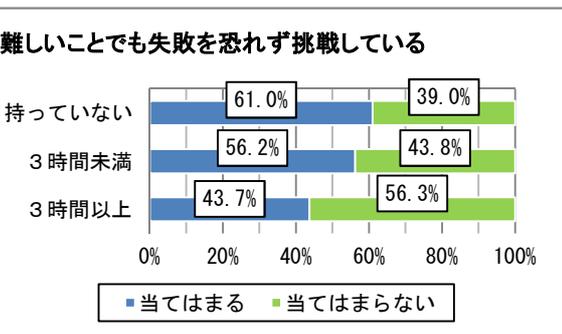
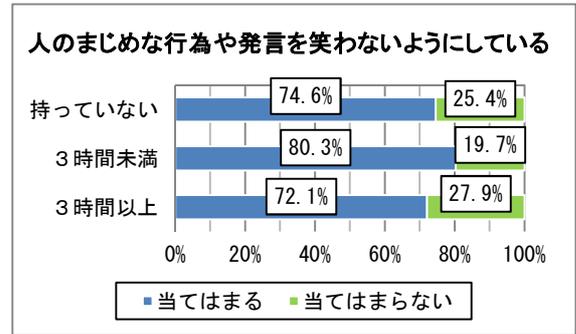
中学生、高校生ともに、携帯を3時間以上利用している生徒は、午前0時以後に寝る割合が高くなっている。特に中学生は、携帯を3時間以上利用している生徒と、そうでない生徒との間に顕著な差が見られ、携帯を長時間利用することが、睡眠時間等の基本的な生活習慣に、より強い影響を与えると考えられる。

次に、携帯の利用時間と「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」との関係について分析を行った。ここでは、項目「人のまじめな行為や発言を笑わないようにしている」「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」それぞれとの関連について取り上げる。図13は中学生、図14は高校生のクロス集計の結果である。

【図13 中学生の調査結果のクロス集計】



【図14 高校生の調査結果のクロス集計】



「人のまじめな行為や発言を笑わないようにしている」という項目について“当てはまる”と答えた割合は、中学生、高校生ともに、利用時間の長い生徒が低くなっており、特に中学生は、その傾向が顕著である。また、「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」という項目について“当てはまる”と答えた割合も、中学生、高校生ともに、利用時間の長い生徒が低くなっている。特に中学生は、“当てはまる”と答えた割合が、「持っていない」「3時間未満」と答えた生徒でほぼ同程度であり、「3時間以上」と答えた生徒との差が顕著である。このように、携帯の利用時間が長い生徒は、「豊かな人間性」または「豊かな人間性を育むための意識や行動」として捉えたいいくつかの項目について“当てはまる”と答えた生徒の割合が顕著に低くなっている。

これらのことから、携帯を長時間利用する中学生や高校生は、基本的な生活習慣や行動、規範意識に問題が見られる傾向があること、特に中学生は、その傾向が顕著であることが明らかとなった。

(2) 児童生徒調査結果の因子分析

児童生徒の調査結果について、項目間の関連性を探るために因子分析を用いた。そして、因子構造（項目のまとまり具合）を比較することで、発達によって児童生徒の意識がどう変化するかを分析した（別添資料7）。

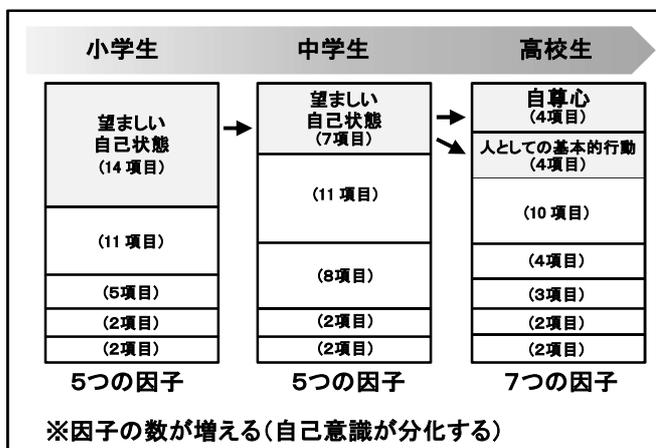
その結果、図15のように、小学生では因子の数が5つであり、項目が大きくまとまっているのに対して、高校生になると因子の数が7つに増える状況が見られた。このことは、小学生では自己意識がまだ十分に分化していないが、発達とともにより分化していくことを表していると考えられる。

ア 身近な人に褒められることで自己肯定感や自己有用感が高まる小中学生

図15にあるように、児童生徒の因子のうち、含まれる項目から「望ましい自己状態」と解釈できる因子がある。小学生は「人の役に立っている」

「よいことをして、身近な人（親や先生）にほめられる」など14の項目が「望ましい自己状態」と解釈した因子に含まれていたが、中学生になるとその因子に含まれる項目は7つに減り、高校生になるとその因子に含まれていた項目は、「自尊心」や「人としての基本的行動」と解釈できる2つの因子に分かれた。また、個々の項目の関連性から、小学生は人の役に立つことと褒められることを同じ意識の中で捉えているが、高校生になると、人の役に立つことと褒められることを別のものとして意識していることが読み取れた。

【図15 児童生徒の発達による因子構造の変化①】



このことから、小中学生は、よいことをして人に褒められると、自分にはよいところがある、自分は役に立っていると考えられる傾向があることが分かる。ただし、「望ましい自己状態」と解釈した因子は、「規範意識」や「他との交流（小学生）」「他に対する配慮（中学生）」と解釈した因子との相関関係も認められている。活動を通してよいことと悪いことをきちんと教えること、よいことをしたときには、何がよかったのかを分かりやすく褒めたり認めたりすることが有効であると考えられる。

イ 周囲への配慮ができるようになる中学生

図16は、小中学生の周囲との関わりに関する因子構造の変化である。小学生で「他との交流」と解

積した因子は、中学生になると、「自分の役割や仕事を、責任をもって果たしている」「人が困っているときは進んで助けている」「人のまじめな行為や発言を笑わないようにしている」の項目が含まれ、この因子は「他に対する配慮」と解釈することができる。このことから、周囲の人との関わりの中に、周囲への配慮ができるようになっていたり、周囲からの配慮を実感できるようになったりすることが分かる。

そこで、中学生は他との関わりを通して人間性を育むことが効果的であり、例えば、生徒に役割や仕事を与え、責任をもって果たす経験を積ませながら、具体的な行為を通して認め、励ますことが、豊かな人間性を育むために有効であると考えられる。

ウ 人の役に立っているかどうかを、細かく具体的に考えるようになる高校生

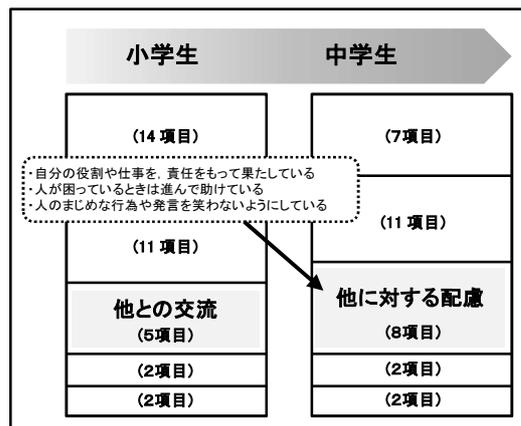
図 17 は、高校生の因子構造について、相関が認められる因子同士を線でつないだものである。小中学生と比較して異なる特徴は、因子の数が増えているということと、ほとんどの因子同士に相関が認められることである。因子の数が増えていることは、自己意識が分化していることを意味し、本調査でもそれぞれの項目の内容を区別し、理解して答えられるようになったと考えられる。また、因子同士に相関が認められることは、項目の内容を区別しながらも、それぞれの関連を自覚するようになってきたと考えられる。

このことを踏まえ、8(1)イ(ア)で報告した自尊心に関する調査結果（「わたしは、人の役に立っている」の項目に“当てはまる”と答える児童生徒の割合は学年が進むに従って低くなる）について考えると、『学年が進むに従って、単に自己有用感が低くなっていく』のではなく、別の見解を得ることができる。高校生では、「自尊心」と解釈した因子について、「他に対する配慮」や「他との関わり」と解釈した因子との相関が認められる。このことから、他に対する配慮ができる自分であるかどうかの自己評価が、自尊心に影響していることが分かる。つまり、自尊心に関する調査結果は、『人の役に立っているかどうかを、より細かく、具体的に考えるように成長している証である』と捉えることができる。

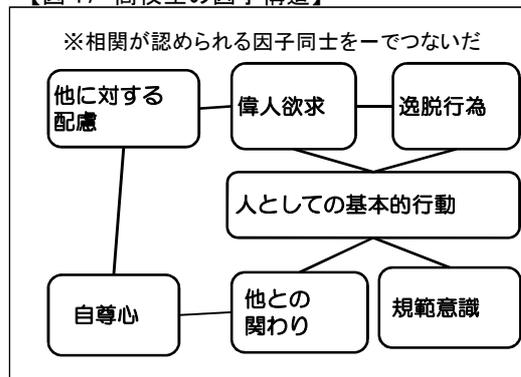
(3) 保護者調査結果の因子分析

保護者の調査結果について、項目間の関連性を探るために因子分析を用いた。そして、因子構造（項目のまとまり具合）を比較することで、子どもの発達段階によって、保護者の意識がどう変化するかを分析した（別添資料 8）。図 18 は、児童生徒と保護者の因子構造を比較したものである。児童生徒の因子の数は、小学生では5つ、高校生では7つと増えているのに対して、保護者の因子の数は、子どもの学年が進むに従って7つ、6つ、5つと減っている。保護者の調査項目は、「自分の子どもの行動についての評価」「保護者としての子どもへの働きかけについての評価」で構成されている。このことから、保護者は子どもの発達に伴って子どもに自身の行動を任せるようになり、子どもの行動の細

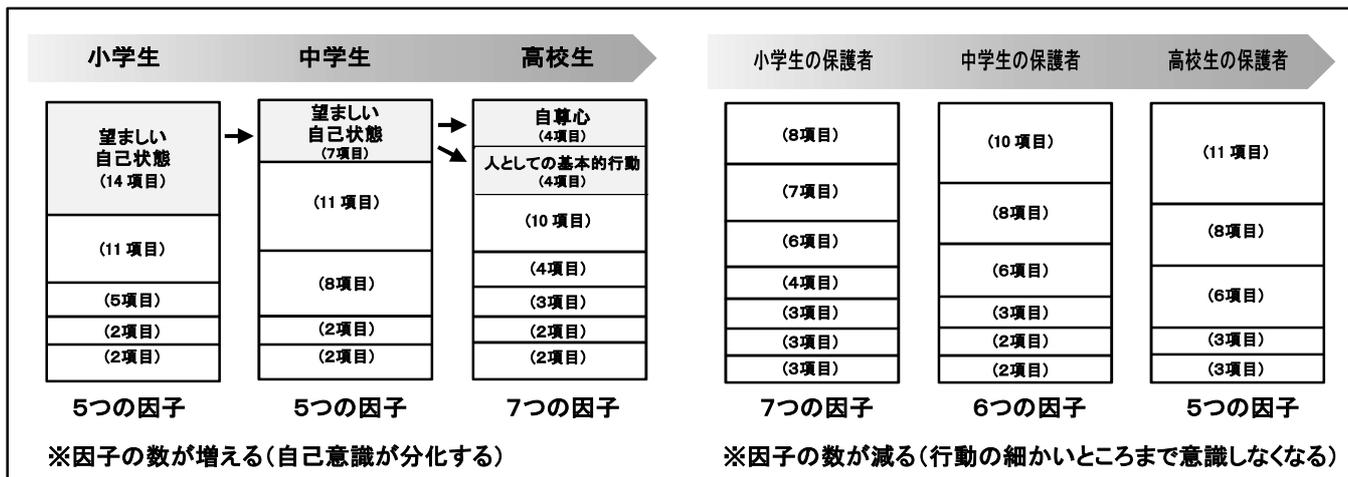
【図 16 発達による因子構造の変化②】



【図 17 高校生の因子構造】



【図 18 児童生徒と保護者の因子構造について】



かいところまで意識しなくなることが明らかとなった。

(4) 豊かな人間性を育むための児童生徒と保護者等周囲の関わりについて

因子分析から明らかなように、児童生徒の自己意識が発達とともに分化することから、保護者等周囲の大人は児童生徒の発達段階に応じた支援が必要であると考えられる。

小学生に対しては、自己意識が発達の途中であるため、基本的な生活習慣や規範意識を身に付けさせていく必要がある。保護者の因子分析によると、子どもの行動の細かいところまで意識し、規範の教授を行っていることが分かる。しかし、調査結果によると、児童は、家の人や先生、近所の人など、周囲の人からほめられたり叱られたりしたと感じる機会が減る傾向にあり、児童の実際の行為を通して「ほめる」「しかる」行為が繰り返されていない可能性がある。そこで、小学生には、周囲の大人が共通理解を図り、一貫性のある指導を継続的に行うことで、具体的な行為を通してよいことと悪いことをきちんと教える必要がある。

中学生に対しては、小学生と同様に自己意識が発達の途中であるため、基本的な生活習慣や規範意識を身に付けさせていく必要がある。また、中学生の因子分析によると、次第に周囲への配慮ができるようになってきたり周囲からの配慮を実感できるようになってきたりすることから、周囲と関わるための役割や仕事を与え、責任をもって果たす経験を積ませることが望まれる。そして、生徒に任せるだけでなく、周囲の大人が生徒の活動に関わり、必要に応じて具体的な支援や評価を行うことが有効である。

高校生に対しては、自己意識が分化し、周囲への配慮ができるかどうかの自己評価が自尊心に影響する時期であることを考慮する必要がある。そこで、自分に何ができるかを考えさせ、それを自発的に体験したり、学習している内容の専門性を生かした活動を行ったりする機会を設けることが望まれる。そして、自立した社会人として地域社会に貢献するなどの活動に取り組むことができるよう、周囲の大人が共通理解を図り、支援体制を築くことが重要である。

(5) 実態調査の分析から得られた「体験活動を通して豊かな人間性を育む」手だて

以上の分析により、豊かな人間性を育むためには、発達段階に応じた支援が必要であることと、その支援方法を明らかにした。また、豊かな人間性を育むために体験活動や人と関わり合う活動が有効であることは、さまざまな研究等で報告されている。そこで、調査結果の分析を総括し、学校の教育活動における児童生徒の発達段階に応じた体験活動の在り方について、家庭・地域との連携の在り方について、配慮すべき点を以下に示す。

ア 小学生の体験活動

小学生には、体験活動や人と関わりあう活動を通して、よいことをしたときには何がよかったのかを、悪いことをしたときには何が悪かったのかや、どうすればよいのかを分かりやすく教えることが必要である。さらに、体験活動を振り返らせ、自分が経験したことを認識し、意味付けを行うことで、自分の思いと行動がつながり、充実感、満足感、達成感を高めることができる考える。また、保護者は比較的小子どもとの関わりが多く、子どもの意識や実態を把握していること、児童と地域との関わりが比較的事あることを踏まえ、家庭・地域にはより具体的で意図的な情報発信を行い、共通理解を図ることが有効である。

イ 中学生の体験活動

中学生には、なるべく役割や仕事を与え、周囲との関わりを通して役割を果たす経験を積ませることが大切である。その際、自分の得意不得意やできるか否かを、体験を通して見定めていく機会を設けることも大切である。そして、自分が役に立っていることを自覚することや、周囲から認められ、励まされることが、自己有用感を高めることにつながる。また、小学生の頃より保護者や地域の人々との関わりが少なくなるが、まだ十分な自己管理能力が備わっていない時期でもある。このことから、家庭や地域と相互に連携して体験活動を実施し、生徒が認められるような機会や、家庭で話題にしてもらう機会を意図的につくる大切である。

ウ 高校生の体験活動

高校生には、役割や仕事を一方的に与えるのではなく、自分には何ができるかを考えさせ、主体的に体験する機会を設けることが大切である。その機会を通して自尊心を高めることができ、それが他の意識や行為にもよい影響となる。また、高校生になると、中学生の頃より保護者や地域の人々との関わりが更に少なくなる。このことから、学校は主体的に体験する機会として、地域の大人や子どもと関わる活動場面を設定するとともに、家庭でも話題にできるよう活動の様子等について情報発信をすることが必要である。

9 各学校の実践概要（平成26・27年度の取組）

児童生徒の発達段階に応じた体験活動、学校・家庭・地域におけるさまざまな人との関わりを通して、児童生徒の豊かな人間性を育む効果的な指導の在り方を探るため、以下の6校の研究協力委員による実践を行った。

(1) 日進市立赤池小学校

地域と児童が関わる活動が多い特色を生かし、「地域キラキラ隊」など、地域や保護者と関わる活動の充実を図った。そして、児童の自己肯定感を高めるために目的意識をもたせ、活動後には自己の活動を評価したり保護者や周囲の大人に評価されたりするなど、発達段階を考慮した支援を講じた。

(2) 田原市立赤羽根小学校

地域との交流の機会が多い特色を生かし、「全校一斉道徳授業の公開」「あかはに探検隊」「学級・学校農園」「ボディボード体験学習」等の交流活動の工夫や、家庭や地域への情報発信の促進を行った。また、異学年交流や縦割り班活動を工夫し、児童同士の交流も推進した。

(3) 南知多町立豊浜中学校

豊浜中学校では、生徒の幼少期から地域との関わりが多く、その地域性を生かした実践を行った。

日頃から積極的に協力していただける地域の方や生徒たちをよく知る保護者の方々との相互連携を図り、保護者を交えた道徳の授業や、地域の協力を得て「福祉体験活動」に取り組んだ。

(4) 碧南市立新川中学校

生徒会主催のボランティア活動などを通して地域との共同体験活動を実施しているので、それらの活動を生かして実践を行った。生徒の自己肯定感や自己有用感を高めるために、地区の清掃活動「クリーン大作戦」を通して、地域から認められ、さらに生徒同士がお互いを認め合う機会を多く設けた。

(5) 県立一宮北高等学校

学校近隣の小学校に通う児童とスポーツを通じて交流を深める「地域交流スポーツカルチャーバイキング」を年1回実施している。そこで、この活動の計画や実施に当たり、生徒の自主性を尊重しながら進めることにより、自立した社会人として地域社会に貢献する機会を通して生徒の自己有用感や自尊心を高めようとした。

(6) 県立知立高等学校

学校設定教科「キャリアデザイン」を通して地域と自己との関わりの深化を図っている。そこで、キャリアデザインにより生徒が地域の方々と関わる機会を生かし、生徒に「思い」を「行動」へ移すことを特に意識させながら活動させることで、自己有用感を高めようとした。

10 研究のまとめ

児童生徒及びその保護者の実態調査結果の分析と各研究協力委員の研究実践により、いくつかの成果と課題が明らかになった。

まず、調査結果からは、児童生徒の規範意識や自己有用感の変化、周囲の大人や地域活動との関わり、携帯電話の利用と基本的な生活習慣との関係等、発達段階の違いによる傾向を示すことができた。そして、因子分析によって児童生徒の発達による意識の分化や、保護者の子どもに対する意識の変化が明らかになったことから、発達段階に応じた効果的な体験活動や、学校・家庭・地域等周囲の大人がどのように関わるべきかを確認できた。

また、各研究協力委員の研究実践では、既存の体験活動に適切な工夫を加えることで、豊かな人間性を育む指導となり得ることを確認することができた。小学生は体験活動を振り返ることで自分ががんばったことを認識したり、家庭や地域との交流を通して周囲の大人から褒められたりすることにより、豊かな心の成長が感じられた。中学生は家庭や地域と連携した教育活動や地域における体験活動を通して、自己の考えや活動を周囲の大人から認められることにより、自信をもって活動する姿が見られた。高校生は自らの思いを行動へと移す環境整備を学校が支援したり、地域交流活動において生徒の自主性を尊重しながら活動を進めたりすることにより、生徒の責任感のある行動が見られた。

このように、児童生徒の豊かな人間性を育むためには、学校・家庭・地域が相互に連携を図り、発達段階に応じた手だてを講じながら体験活動を推進することが大切であることが確認された。

ただ、いくつかの課題も挙げられる。第一に、本研究実践を進めるにあたり、児童生徒の豊かな人間性がどのように生まれ、身に付いたかを見取るための、具体的で明確な方法が見いだせなかったことである。本研究では、アンケート調査や感想、態度からそれを判断したが、より多くの観点からの検証が必要である。

また、第二に、家庭や地域と連携した活動は、すでに小中学校で盛んに行われている。本研究の研

究協力委員が自校の活動を見直し、改善することによって、より効果的な取組になることが明らかになった。これと同様の見直しや改善の必要性や効果を広く伝える必要がある。

第三に、豊かな人間性を育むためには、保護者と児童生徒との関わりが大切であることが改めて確認された。そのことを、どのように保護者に周知するかということである。学校が家庭の理解と協力を得ることから始まり、保護者自らが必要性や効果を実感し、相互に連携できる関係を築く必要がある。

11 おわりに

当センターでは、ほぼ5年に1度、県内の児童生徒を対象とした実態調査を行っている。今回の実態調査では、新たな分析方法（因子分析）を採り入れることにより、児童生徒の発達段階による意識の変化や、それに伴う保護者の意識の変化も捉えることができた。そして、研究協力委員もそのことを踏まえながら、より効果的な取組を進め、それぞれの学校において豊かな人間性を育む指導の在り方に関する成果が得られた。今後は、本研究の成果を広く還元することで、児童生徒に関わる周囲の大人が一貫性のある指導を継続的に行うことができるように学校・家庭・地域の相互連携を強化し、児童生徒の豊かな人間性が育まれることを期待したい。